

研究室の窓から



ロシアの大学の現在

所伸一

□ サハリンとの交流

私の属する学部は、アメリカのオレゴン州立ポートランド大学教育学部とロシアのユジノサハリンスク国立教育大学、この二校といわゆる姉妹校協定を結んでおり、教員の相互派遣や出版物の交換などを続けている。そのうちサハリンとは、現在、文部省科研費（国際共同学術研究）

による三カ年の共同研究を進めている。

この研究の代表者は私の学部の教育社会学の教授（小林 甫）で、テーマは「非重工業化地域の内発的発展と青年教育改革に関する日本・イタリヤ・ロシアの比較研究」という大きなもので、学校―職場―地域のトリアードを設定し、それらが青年の自己形成にどう関わっているかを三国の中小企業の多い地域で比較追究し、地域において彼らの自立を促す要因をさぐろうとするところみである。

この調査・研究にロシア側からサハリン州の教育大学の教育学者や社会学者に参加してもらっているのである。

ロシアの教育を研究してきた私は、この情勢の下でチャンスに分けてもらい、九二年五月以来三度サハリンを訪問している。サハリン州は面積で北海道とほぼ同じ、人口は約七十万であるが、この大きさのことは抜きにして、その住民構成や互いに行き来があった地理的な位置、似ている自然のため、ロシアの中でも私

が特に親近感をおぼえる地域である。こういうサハリンだからこそ土地の人々と胸を開いた話ができたと思っている。

□ ディアローグの時代

このユジノサハリンスク教育大学は八八年に東洋学部日本語科・朝鮮語学科を開設したのを皮切りに現在、ロシア極東の地域発展のための総合大学への拡充・発展をめざしている。そして、工学部が欲しいと言っている。だが前途はなかなか厳しいようだ。

私が特におぼえているのは、九二年春に学部代表団として訪問し、これからは具体的な共同研究を組織しようと呼びかけた時、サハリンの学長が返す挨拶で言った言葉である。それは「われわれはあなた方の大学との研究交流に期待する。われわれの大学はモノローグの世界からディアローグの時代にやっとなるところだ」というものであった。言葉を受けとめて、私たち日本の大学の研究・教育は

世界への貢献たりうるだろうかと私は身が引き締まる思いであった。

だが、さらに当地の大学施設を見せてもらった時は複雑な思いにとらわれた。それは、物理学科の図書室には、これは自然科学分野であるのに英語の図書、雑誌をまったく所感していないこと、教育学科の本棚にも外国の研究書などはいっさいなく、大学教科書、教員向け雑誌ばかりであることを知ったからである。数学者の学長の挨拶の意味が改めて分かった気がして、スターリン的な国家主義・閉鎖システムの歴史の「つけ」は大きいものだと実感したのであった。

ところで今年四月二十五日には、「ロシアの大学の現状と発展見通し」のテーマで連邦上院の議会公聴会がおこなわれたが、そこでロシア大学長同盟の会長、ウラヂミール・ヴィノグラドフは次のように訴えている。「同盟理事会は大統領と政府あてのアピールで、大学の危機の深刻化をくい止めることができなかつた、

大学の制度において崩壊が始まった、大学の財政状態はカストロフ的に悪化した、この三年間で三十万人の研究者が外国へ移住したと書いた「高等教育制度の破綻は、現在おこなわれている改革を無にしてしまい未来をなくすものであり、国をあともどりさせるものだ」。どうやって物的状態の問題をキチンとするか、どうやって高等教育機関を西側の大学の水準まで本当にもって行くか、これが一番さしせまつた問題なのだ（教員新聞、モスクワ、一九九四年十九／一〇号、五月四日）。このあたりがロシアの大学指導者の現在の平均的な本音かと思われるのだ。

□ 未完の近代革命

ロシアの大学の現状を知るにつけ、こゝでも、ではペレストロイカ以後の事態の本質は何か、さらにソビエト時代とは何であったのかという、引っかかっている評価が頭にちらつくのである。こんなことがあった。九二年、同教育大の「教

育学研究室」で私が日本のヘソビエト教育の研究の歩みと反省を報告した際、向こうの講師の一人が、やおら議論を離れて、「日本では国家のイデオロギーが学校や大学に介入することがあるか」と質問してきたのである。私はもちろんそれが近代日本で中心問題の一つであったし現在も争点であり云々と説明したが、こうした質問がここでも出されたので、私はやっと当地でも社会意識に上りはじめたものと思い、うれしく感じたのであった。

ロシアでは今、これまでの国家党と個人の関係の間に、社会の中で人々を結び付ける制度として、やっと地域とか大学とかがその中間組織として意識され始めているように見えるのである。再建運動が起きている教会などもそうした役割をになうのかも知れない。

大学もふくめて社会の近代的な再組織というのが今のロシアの事態だと言えそうである。

ところ・しんいち 北海道大学・教育学部